



夏の海の中、人魚がにっこりと笑っています。


たくさんの魚たちと一緒に、楽しさも何倍にもなりますね。透明な海の中で、サンゴや貝がキラキラしています。バレエを踊ることが趣味で友達といっぱい遊ぶことの大好きな女の子が描いて下さいました。そろばんが得意と教えて下さいました。人魚のように笑顔のかわいらしい女の子です。夏のキラキラしている太陽、海のにぎやかな、そして人魚のかわいらしい今月の表紙です。

夏の暑さにも負けない、心躍る素敵な表紙をありがとうございます。

院長をはじめスタッフ一同心より感謝致します。



医療法人 優慶誠会

豊郷たちかわ皮膚科クリニック\* 

仕事が生に占める割合は大きいはずです。

この事を否定する方は多くはないと思います。

少なからず生に影響を与えるはずの仕事をどうとらえるかで生は大きく変化します。

京セラの創業者で日本航空再建後、現在は名誉会長を務める稲森和夫氏は、フィロソフィーの中で生（仕事）の結果は、考え方×熱意×能力であると説かれています。例えば何となくですが、考え方と熱意と能力が各々掛け合わされば生（仕事）は成功するのだろう。又仕事で成功したければ考え方と熱意と能力を身につける様努力すれば良いのだからの事は誰にでも容易に理解できます。しかしずっと以前から引っかかっていたことがありました。何故×（掛ける）であって、+（足す）ではないのだろうか。この疑問は最近になってようやく理解できる様になり始めた気がします。

$$\text{生（仕事）の結果} = \text{考え方} \times \text{熱意} \times \text{能力}$$

↑                      ↓  
なぜ掛ける？

それは・・・。例えば「 $2 \times 3 = 6$ 」という式があるとします。6というのは2と3を掛けた結果であるばかりでなく、同時に素因数分解が出来たことでもあります。逆に言うと因数に分けるということは、掛け算の形に直すということでもあります。因数とは簡単に言えば“原因になっている数”のことです。そして原因というのはそれ自体の性質そのものですから、6という数は2の性質と3の性質が合わさってできた結果であります。逆に言うと2と3は互いに掛け合うことによって、今まで自分が持っていた特徴を失うことなく相手の要素を身にまとうことになるのです。つまり今までの自分の特徴（性質）を生かしたままさらなる高みへと昇れる訳です。

しかし足し算はこうはいきません。

例えば「 $2 + 3 = 5$ 」の5には2の要素も3の要素もありません。もちろん5は異質なもののへの変化であるとは言えますが、自分らしさを失うことがあるのが足し算なのです。

言いかえれば、掛けるというのは自らの特徴を生かしたまま他の特性を身につけ、次元が変化することであり、足し算というのは同種の量をまとめるにすぎないのです。つまり、3人と3個という様に異種同士というのは足せないのが足し算なのです。

以上のことから、考え方と熱意と能力という、いわば3つの因数を組み合わせることによって初めて仕事や生の成果が出るという掛け算の数式が成立するのです。

また、この式ではこうも考えられます。熱意と能力は負の数にはなり得ませんが、考え方というのは誤れば負になることもあります。つまり、どんなに熱意と能力の数が大きくても考え方が負であれば結果は大きくマイナスになり得るのです。だから日常において成果を出したい時は、ただ闇雲に行動するよりも考え方と熱意と能力に分割して考える様にすればどこに力を入れる

べきか分かることになります。

ここでいう「考え方」を稲森和夫氏はこう言ってます。「行き詰った時など最後には、人として何が正しいかどうかで判断する」と。これを私なりに解釈するところだと思います。損か得かで判断すると誤ることがある。しかし人として正しいと判断した事で誤ることはない」こう言っていることのように思えます。

松下幸之助氏は、「熱意」に関してこう述べています。「二階に昇りたいなあ。ではダメである。どうしても二階に昇る。その熱意がハシゴを生み出す」と。

そして能力とは物事を成し遂げる力のことです。これを上げたり一定以上に保つためにはひたすら努力することに尽きるでしょう。なぜなら一つだけ明らかなのは、これは自然に“つく”ものではないこと。そして努力を止めると衰退するものだからです。

院長・拝